



# 日本銀行本店本館の建設



辰野金吾は欧米の銀行建築の視察後、ロンドンで設計の原案をつくり、帰国後約半年で設計を纏めた。建設にあたっては、官庁の営繕組織や旧来の大工組織を使わず、新たに建築学を学んだ技師等で施工体制を整えた。

## 1. 本店本館建設のあゆみ



日本銀行本店并金庫建築ノ顛末及ヒ趣旨 1890年8月 日本銀行総裁川田小一郎謹述

本店新築にあたり、その予算が80万円と当初想定の2倍となったことについて、金庫の堅牢さが必要であり、その模型も製作し内閣の閲覧に供し、中央銀行としてその必要性に理解を得て着工するものであることを株主総会で述べた原稿。

日本銀行新築場沿革図



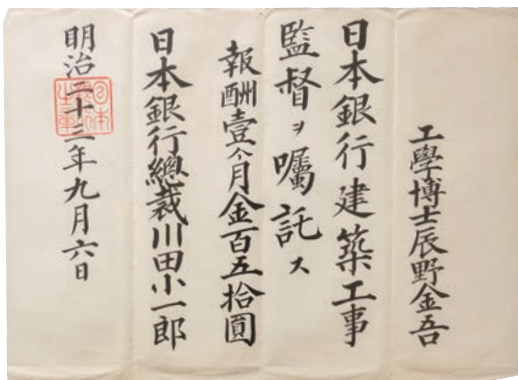
1890年9月26日 9月1日に地鎮祭を行い着工した。根切工事に先行して掘削位置を示す縄張りが施されている。



1891年5月2日 厚さ約2.6mの礎盤コンクリート工事が完了し、建物基礎となる煉瓦の根積み工事に着手した。



1892年3月10日 基礎式(定礎式)の様子。前年11月に予定されていたが10月末の濃尾地震により延期された。

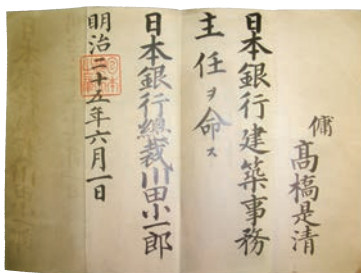


日本銀行建築工事監督辞令 1890年9月  
東京大学蔵 (旧辰野家資料)



1891年9月1日 東南側から撮影。足場の中から、地下金庫の煉瓦積が見える。10月には首相ほか閣僚が視察に訪れた。地下階の石煉瓦積工事は同年12月23日に完了。

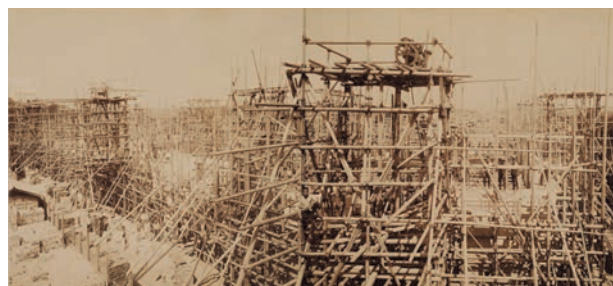




**高橋是清**  
西部支店長時代『高橋是清自伝』に書かれている本館建築に関するエピソードは記録写真などと一致しない部分もある。

**高橋是清建築事務主任辞令**

首都大学東京図書館蔵  
1892年6月に高橋是清は建築事務主任となった。翌年9月には西部支店長となり、本館建築に携わったのは1年余である。



1892年9月1日 前年9月と同じ東南側から撮影。地上階の石煉瓦積が開始され、上階へ資材を楊重するための櫓足場が組まれている。



1892年10月30日 同年8月23日に着工した本館北側の機械室の地下工事。機械室は本館・西分館の熱源機械室として建てられた。



1893年1月8日 1階部分の石煉瓦積を終え、工事は2階部分へ移行した。



1893年9月11日 2階部分の石煉瓦積が進み、バルコニーに上がる工事用のスロープが設置された。9月16日に松方首相が現場を訪れている。



1894年5月18日 3階部分まで工事が進み、屋上に上がる工事用のスロープと仮屋根が設置された。この頃から木工事等の内装工事に着手している。



1894年12月5日 装飾部を含む外装の石積が完了し、屋根工事に合わせ仮屋根も外されている。ドーム屋根に上る工事用のスロープが設置された。



1895年8月14日 ドーム屋根が完成し、外壁頂部を飾るバラストレード等の銅板工事を施工中。

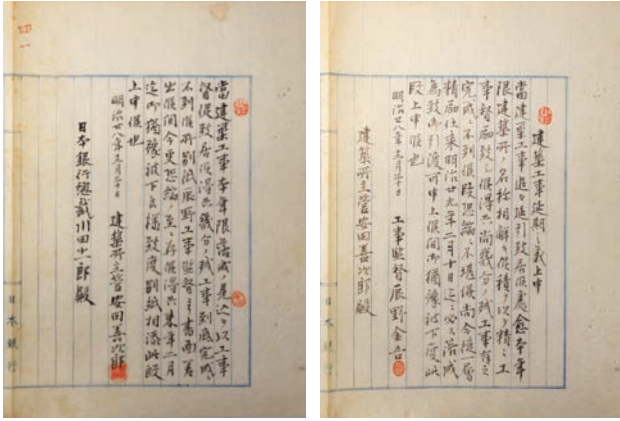


1895年8月14日 足場越しに外装工事をほぼ終えた本館の西側外観が見える。



1895年8月14日 本館工事の途中から着工した西分館と機械室はほぼ完成している。



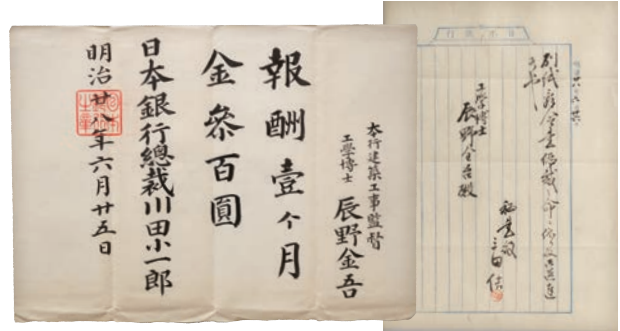


**建築工事延期之義上申** 1895年12月

1895年に落成する予定としていたが、1896年2月に延期になることを辰野金吾が建築所主管安田善次郎へ（右）、同内容を安田から総裁川田小一郎へ（左）上申したものの。いずれにも了承したことを示す「川田」の押印がみられる。



1896年1月18日 足場が外され、ほぼ完成した本館の東側外観。手前に取り外した足場材が積まれている。



**「本行建築工事監督 工学博士 辰野金吾」への報酬の伝達とその添状** 1895年6月

東京大学蔵（旧辰野家資料）



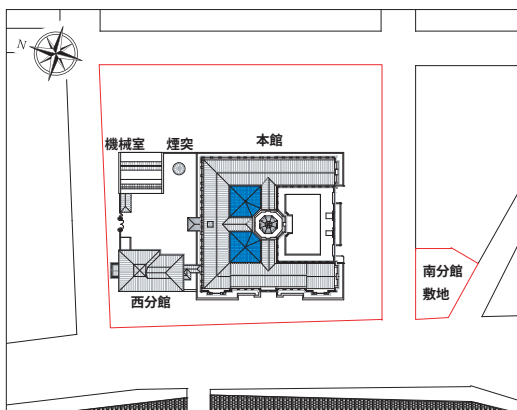
1896年1月18日 既に完成し、本館への熱源供給を待つ機械室と煙突。



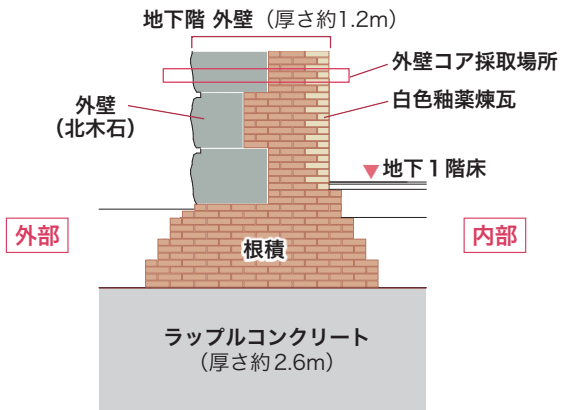
1896年1月18日 仮囲いに覆われ完成日を待つ本館の西側外観。



1896年1月18日 前庭の外構工事を残しほぼ完成した本館の南側正面外観。



本店の敷地配置図



**石積煉瓦造の構造**

厚さ約2.6mのラップルコンクリートを礎盤とし、その上に外壁石および煉瓦を組積している。

## 2. 本店本館の竣工

着工：1890（明治23）年 竣工：1896（明治29）年

構造：石積・煉瓦造、三階建地下一階 延床面積：約11,400㎡

本店建築工事監督：辰野金吾、工事主任：岡田時太郎、製図主任：葛西萬司、建築主管：安田善次郎、計算主任：井上工一  
 施工：分割請負 総工費：約120万円（西分館等含む） 国指定重要文化財（1974年）



日本銀行落成之図 篠原清興

900054

落成式は3月22日に行われた。当時、式典などの際の装飾である緑門で外周が飾られている。4月10日に本店は永代橋から日本橋の新店舗へ移転した。



落成式の様子

落成式には皇族や役人などの招待客数千人が訪れた。



大日本帝国政府日本銀行全景 三代歌川国貞

900051

2～3階を貫くオーダーは実際には継ぎ目の無い円柱であるが、石の継ぎ目が描かれるなど実際とは異なる部分もある。本館西側の中央に現在はない西玄関がみられる。



常磐橋・日本橋川（外堀）と日本銀行西面

明治期に本館ほどの大建築を造りえた背景の一つとして、当時同地域の物流を担っていた日本橋川の水運を利用できた点が挙げられる。本館左に隣接する建物は本館と同時期に建築された西分館。

### 本館のカケラ

#### 本館屋上のバラスト（手すり子）〈右〉

本館外壁屋上部分のバラストは、関東大震災で焼損したが、補修し創建時の姿を今も伝えている。本資料は1973年の改修時にサンプル保存したもの。

本館外壁屋上部分に銅板加工のコーニス（軒蛇腹）とバラストレード（高欄）が廻っている。石造古典様式の胴部位に石以外が用いられることは珍しい。耐震建築を重視し、上部の軽量化を図ったものと考えられる。

#### 2・3号館のバラスト（手すり子）〈左〉

本館に隣接する2・3号館は、辰野金吾の弟子長野宇平治の設計で1935年と1938年に増築された。本資料は2009年の2・3号館免震化工事でサンプルとして保存されたもの。

本館と軒を並べる2・3号館の1階から3階部分は細部まで忠実に本館の外観を踏襲している。

3階外壁頂部のバラストも本館と同一ディテールとし、材質のみ石材に変えている。



本館、2・3号館のバラスト

外壁：北木石

赤煉瓦

白釉煉瓦



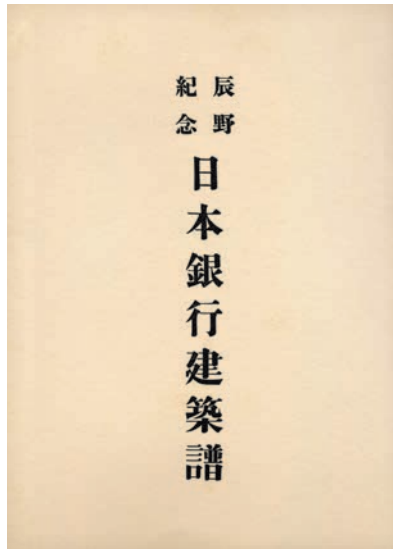
本館外壁コア

本館地下階の外壁から採取したコアサンプル。石積に煉瓦を裏積みした外壁の壁厚が地下階で約1.2mであることが確認できる。地下階の外壁石材は北木石（岡山県北木島産花崗岩）のコブ出し積みで、裏積み煉瓦の室内側に仕上げ材として白色釉薬煉瓦を用いている。



# 3. 本店本館の記録

## (1) 『辰野紀念 日本銀行建築譜』



### 『辰野紀念 日本銀行建築譜』

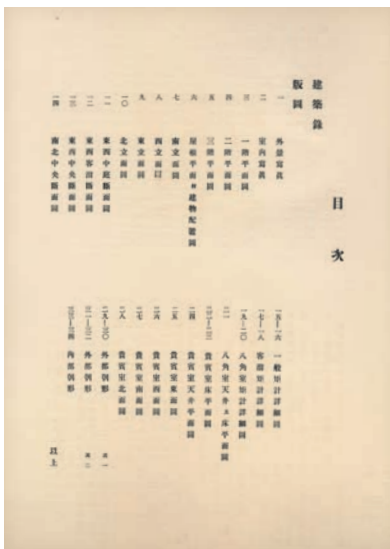
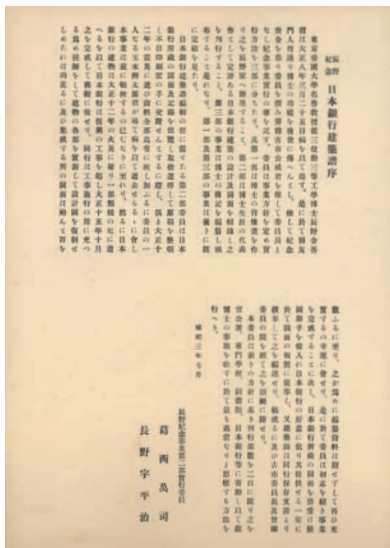
辰野紀念事業第二部 編

墨彩堂 1928年 200部配布

辰野金吾の没後、その功績を後世に伝える記念事業の一つとして、肖像画、伝記（『工学博士辰野金吾伝』）と共に、辰野の代表作であった日本銀行の建築記録の製作が企画された。

日本銀行本店本館の設計図および文書を本館内に集め、記録編纂作業が行われていたが、関東大震災による本館内の火災により、関係図面・書類が焼失してしまった。

記念事業も一時中断したが、同建物の震災復旧工事（1926年）を機に図面を実測復元し、1928年に記録を完成させた。記録編纂は葛西萬司と長野宇平治による。



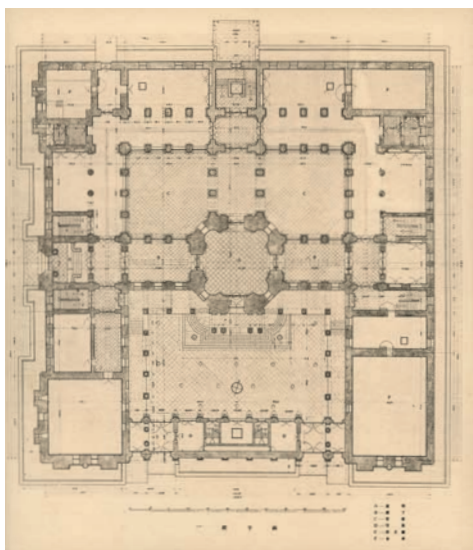
「日本銀行建築録」全9ページ



外景

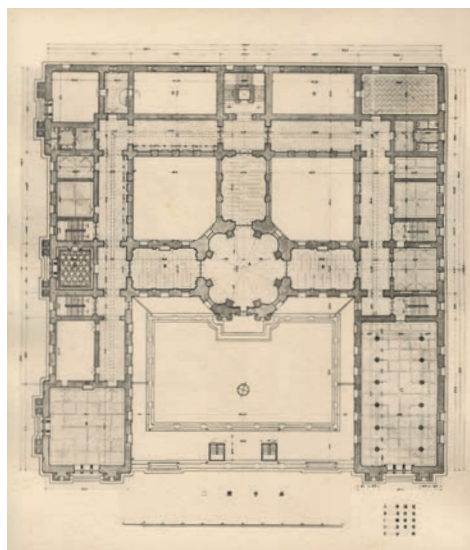


室内（営業場客溜）



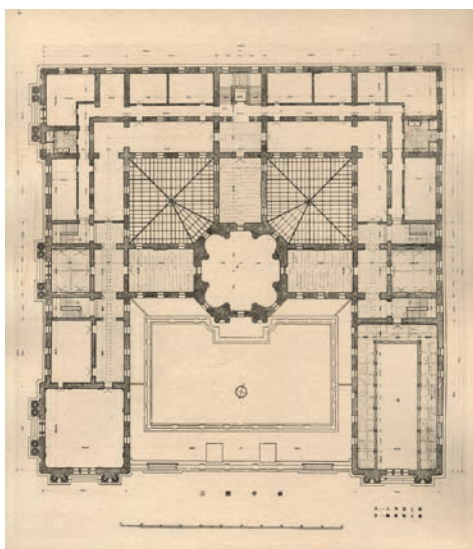
一階平面

建物南側に設けた東西2か所の正門から入る中庭に面して正面玄関があり、その奥に東西2か所の客溜と営業場を設けている。中庭の床面に同地下部の荷捌場へ採光する丸窓が確認できる。また、正面玄関の他に建物西側中央の西玄関と同北側中央の北玄関があった。



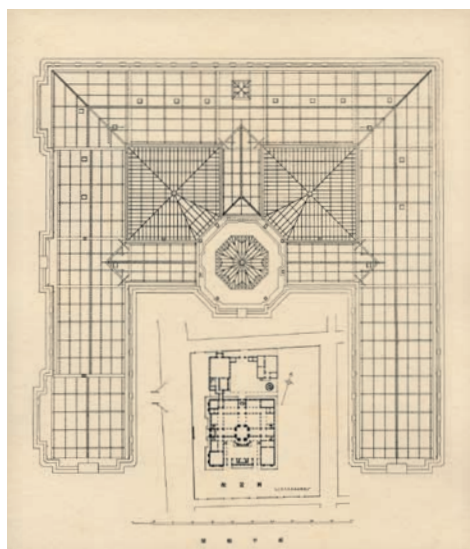
二階平面

正面玄関上部の八角室を中心とする重役室3室と廊下が客溜上部の吹抜けに面している。西翼を総裁室、東翼を集会室とし、西玄関上部に貴賓室を設けた。建物北側中央の階段室に設けたエレベーターは日本で2番目に古い電動乗用エレベーターとなる。中庭の上部に回廊となるバルコニーを設けた。



三階平面

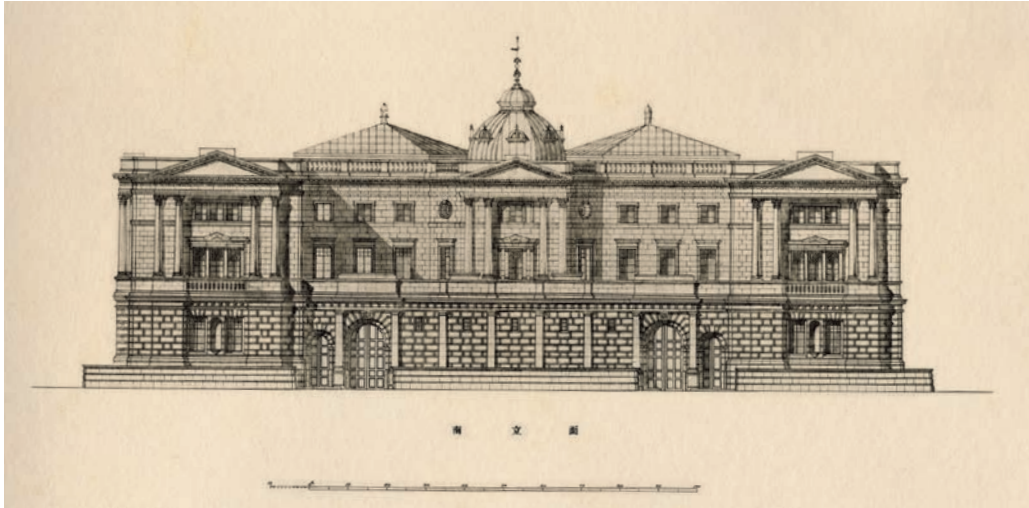
屋根のように見える2か所の方形部分は1階客溜上部の採光のための天井裏部分である。それらに面して、事務室各室を設けた。東翼は2階集会室の吹抜の上部回廊となる。地下階から3階までつながる5つの階段室の中、東側の1か所のみ現存する。



屋根平面

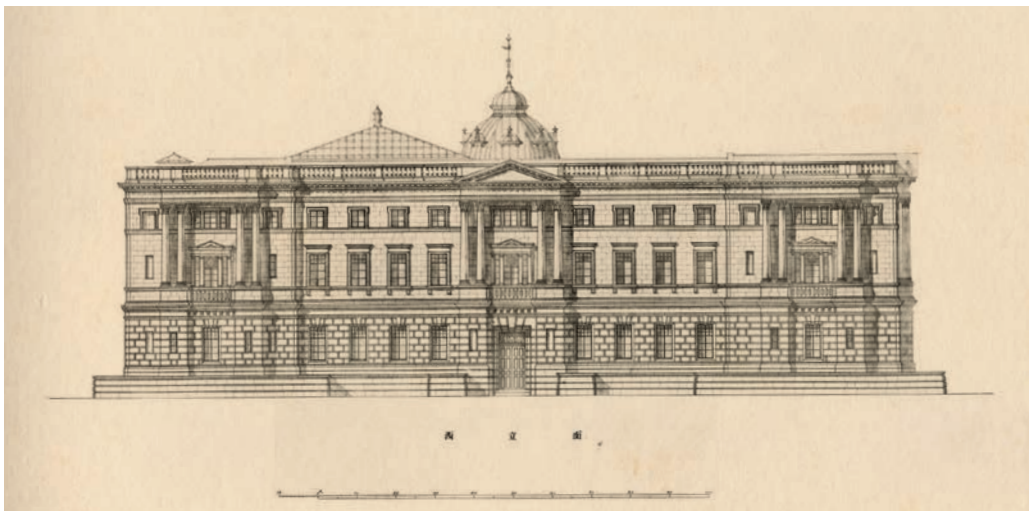
客溜上部屋根を方形のガラス屋根、正面玄関上部屋根をドーム屋根とし、その他は亜鉛鉄板葺きの切妻屋根を設けた。また、同切妻屋根に3階廊下へ採光する天窓と2階の4室に設けた暖炉の煙突が確認できる。





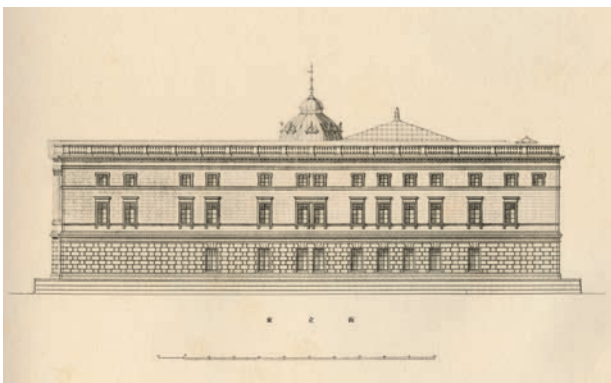
南立面

「コの字型」3階建ての東西両翼に配したペディメントと双柱の大オーダー、及び障壁越しに仰ぎ見るドームで構成されるシンメトリーな古典様式の外観が、安定感と重厚感のある正面性を出している。正面玄関は銃眼型の小窓と大小4つのアーチ型門扉を持つ障壁で遮蔽されている。2・3階を貫く大オーダーはいずれも1本石の科林ト式で、手前の障壁部分はドリス式で継ぎ目のある石でつくられている。



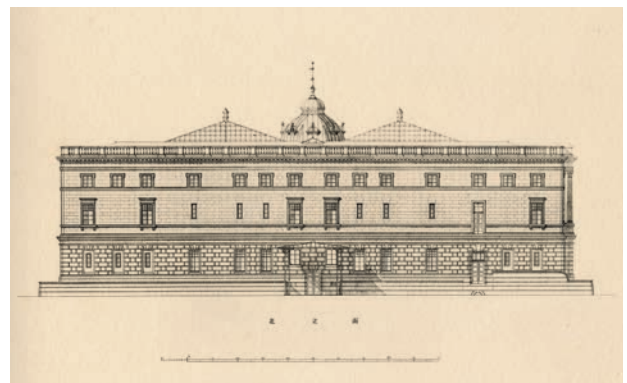
西立面

外堀通りに面する中央に西玄関があった。西玄関は震災復旧工事を機に廃止され、その後階段室に改修された。中央と南北両サイドに配した双柱の大オーダーが南立面に準ずるシンメトリーな正面性を出している。



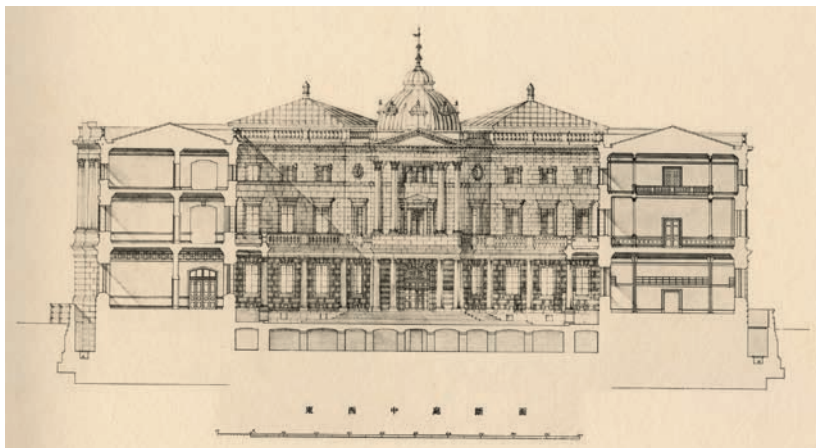
東立面

増築予定の空地に接し、この面だけ窓配置がシンメトリーではなく、平面配置の機能に即した簡素な外観となっている。その後の増築棟（東分館。北分館、および現存の2・3号館）との接続の度に開口部の改修が行われている。



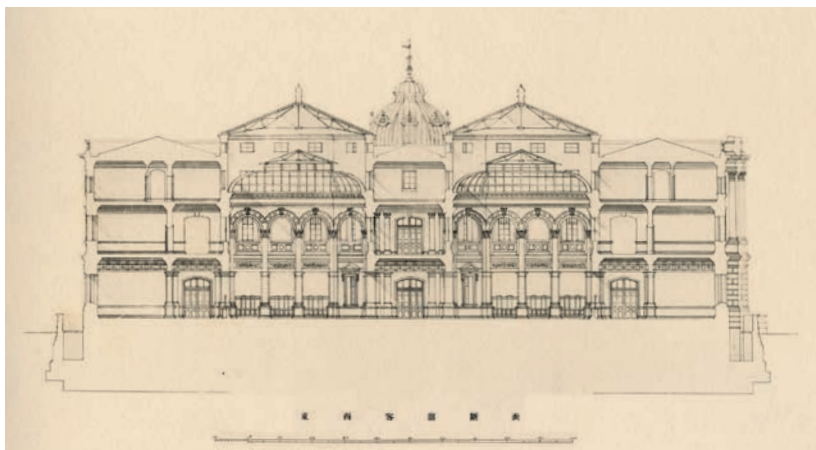
北立面

裏庭に面し、中央に北玄関（内玄関）がある。右側（西寄り）の1・2階に西分館と接続する連絡通路を設けている。1・2階の小窓は金庫室窓で、その後の改修で居室用の大きな窓に改修されるほか、1号館および新館との接続により開口部が大きく改変された。



### 東西中庭断面

障壁で閉ざされた中庭から見る正面玄関。正面玄関の上部に配されたドームとペディメントおよび双柱の大オーダーが建物の中心性を強調している。ドームの両側に、震災時に焼失した客溜上部の方形型ガラス屋根が確認できる。右側2・3階吹き抜けの部屋は集会室となる。中庭のオーダーは手前の障壁部分と同じドリス式だが1本石である。



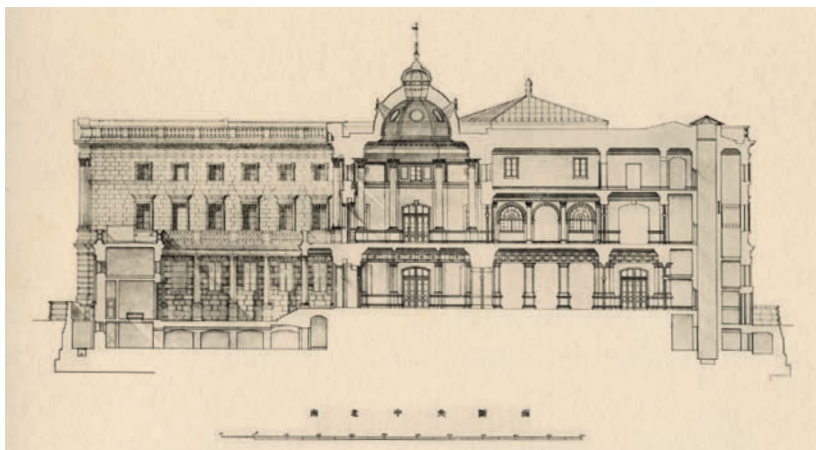
### 東西客溜断面

東西客溜の上部に架かるガラス屋根が、本館建物全体の中心となり、館内全体に自然光を取り込む工夫がされている。断面図には書かれていないが、無窓となる3階中廊下の上部屋根にも天窓が設けられていた。建築譜は一般配布されたため、地下階のうち金庫室は省かれている。



### 東西中央断面

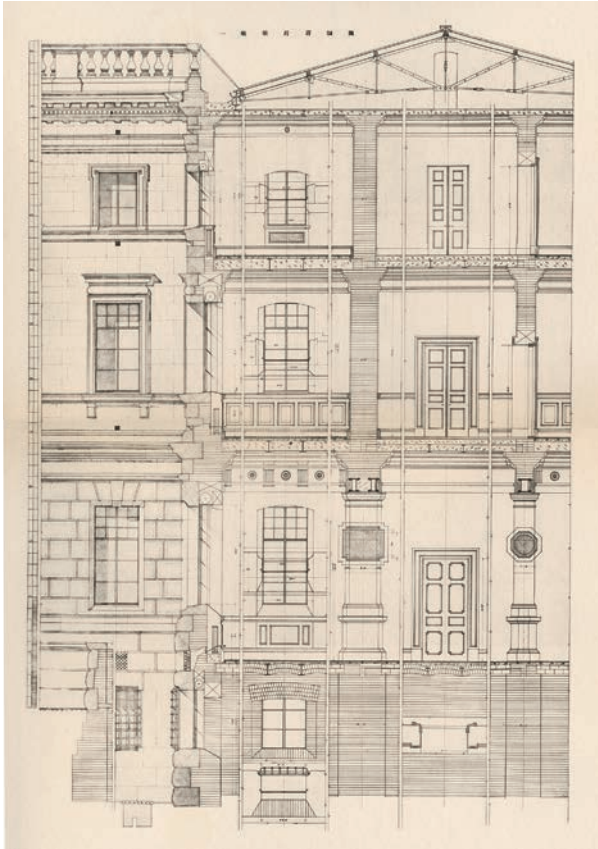
右側の西玄関から左に延びるホールは正面玄関に通じている。中央ドームの下は2層吹き抜けの役員会議室となり、ドーム内と3階の窓からも自然光を取り入れている。



### 南北中央断面

左側から順に障壁、中庭、正面玄関、客溜とつながる動線となり、後方の階段室および北玄関に通じている。四周をバルコニーが巡る中庭の下階は金庫室前の荷捌き場で、正面玄関と対峙する障壁内に下階に通じる荷物用エレベーターが設置されていた。右側階段室内に地階から3階に通じる乗用エレベーターのシャフトが確認できる。



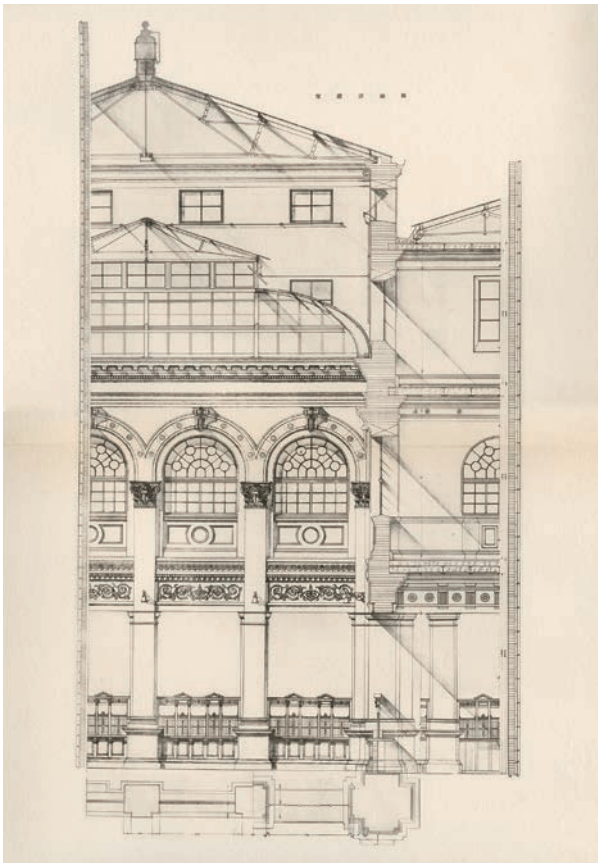


### 一般矩計詳細図

外壁構造は、地階から3階まで外壁石積の内側に煉瓦を裏積みする石積煉瓦造、内壁は煉瓦造、営業場の独立柱は石造となる。床構造は各床とも防火床とし、1階床が錬鉄梁間に煉瓦ヴォールト床、2階から屋上床が錬鉄梁間に灰ガラコンクリート床となる。屋根は切妻屋根とし、屋上床の上に鉄小屋組みを架け、その上に波型亜鉛鉄板を葺いている。窓面腰部に設置した放熱器の裏面壁に120mm角の開口を設け、新鮮な空気を取り入れる工夫がされている。

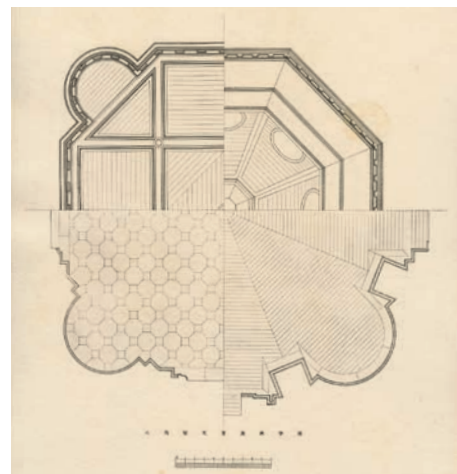
### 客溜詳細図

客溜の光天井上部に架かるガラス屋根からの自然光が、1・2階だけでなく天井裏を通して3階事務室にも採り込まれる工夫が、採光線を描くことにより大きな設計コンセプトになっていたことが分かる。



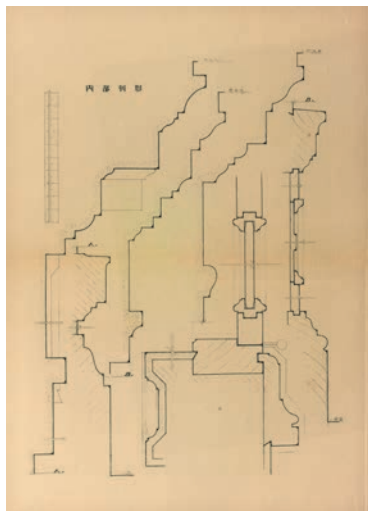
### 中央玄関及八角室詳細図

中央ドーム屋根に設けた8個のドーマー窓、およびドーム頂部の窓からの自然光が、ドーム下の重役会議室に射し込む工夫がされている。2・3階を貫くコリント式オーダーは内外共通だが、外は1本石で継ぎ目が無く、室内は継ぎ目がある。



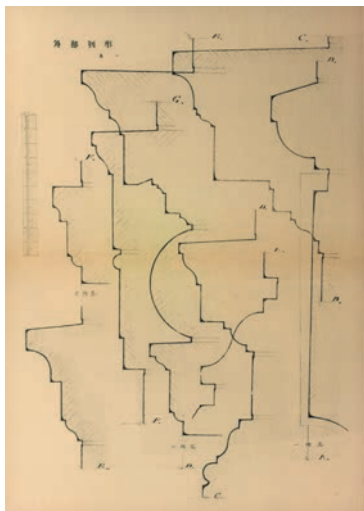
### 八角室天井及床平面

中央ドームの下階となる、1階正面玄関と2階重役会議室は、八角形の室形状から何れも通称「八角室」と呼ばれている。1・2階とも八角形の斜め四方を半円状に広げて、豊かな空間を形成している。1階八角室の床敷石は八角形の石割となっている。



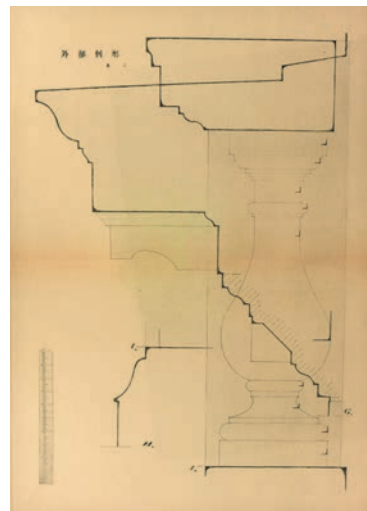
内部刳形

室内の壁面部材（巾木、腰胴縁、長押および天井廻縁）や建具枠に施された刳形装飾を1/2縮尺で示している。



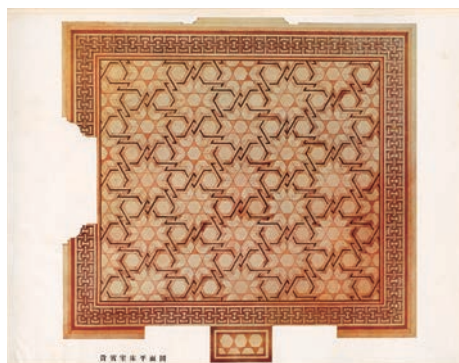
外部刳形其一

外壁に配置された胴蛇腹、窓開口枠には様々な古典様式の刳形装飾が施されている。装飾石は全て北木石が用いられた。1階床レベルから3階上部の胴蛇腹までの全ての刳形断面を1/2縮尺で示している。



外部刳形其二

外壁頂部に配置された古典様式のバラストレード、コーニス等の刳形断面を1/2縮尺で示している。



貴賓室床平面図



貴賓室天井平面図



貴賓室東面



貴賓室西面



貴賓室南面



貴賓室北面

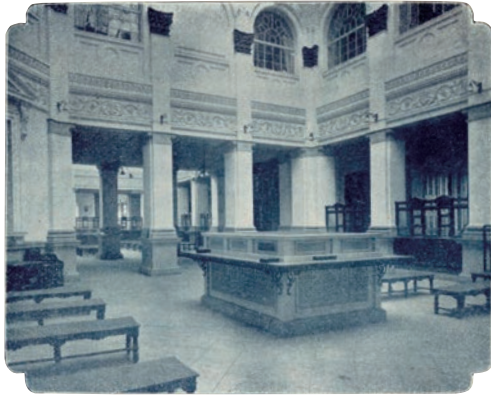
貴賓室

本館2階の西側中央、西玄関の上部に設けられた最上級応接室の図。ピロード友禅の壁装、つづれ織りの格天井、七宝大額「旭日」を飾るマンテルピースなど伝統工芸品を用いた明治初期の和洋折衷の室内意匠に特徴を持つ。



## (2) 竣工後の本館内の記録写真

### 本館 室内



日本銀行営業所の一側面（客溜）



集会室



日本銀行応接室（貴賓室）



日本銀行総裁室

『開国50年史 附録』1907-1908年より。(写真タイトルも同本による)

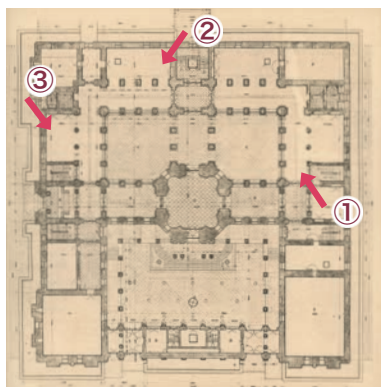
### 本館1階営業場



①営業場（出納局事務室）



②営業場（営業局事務室）



③営業場（国債局事務室）

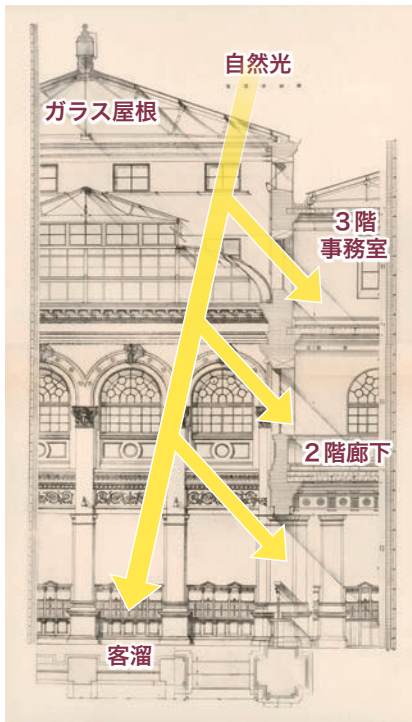


## 4. 日本銀行本店本館の特徴

日本銀行本店は日本人建築家による最初の国家的建築であった。西洋建築技術を日本に植え付け、定着させることを使命とする辰野は、本館建築に多くの先進的設備を取り入れた。

### (1) 採光の工夫

竣工当時の本館は客溜の上部をガラス屋根とし、吹抜けを通して1階客溜のほか2階・3階にも自然光を取り入れていた。



#### 屋根の写真

(関東大震災後の記録写真より)

震災後のものではあるが、方錐形のガラス屋根をやや上の高さから撮った写真としては現存が確認されている唯一のものである。



#### 1階の客溜の様子

電気照明と共にガラス屋根からの採光により照度を確保している。

辰野が事前に見てきた海外の中央銀行建築やその他の多くの建築でも、ガラス屋根からの採光が多く用いられていた。



#### イングランド銀行

Bank of England Archive 蔵



#### ベルギー国立銀行

Museum of the National Bank of Belgium, Brussels 蔵

### (2) 古典様式の石造建築

石造建築として、丸柱・窓廻等の装飾石と1階石積に北木石（花崗岩）、2・3階石積に白丁場石（安山岩）が用いられている。南側の正面中央にドームを頂き、同中央と左右両翼、さらに西側面中央にペディメントと2・3階を貫くコリント式の大オーダーをシンメトリーに配した古典様式の外観とする。



#### 2階・3階外壁石

白丁場石

(神奈川県湯河原産)

#### 1階外壁石および

1階～3階窓枠等装飾石

北木石

(岡山県北木島産)



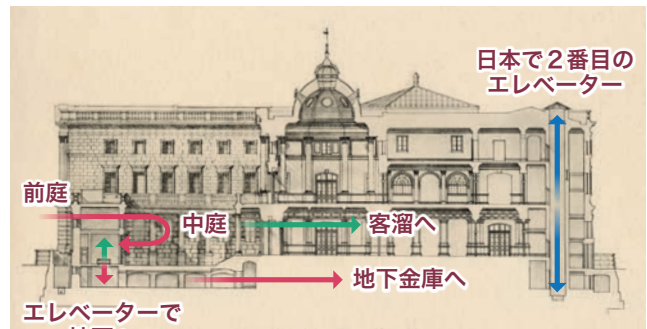


### (3) 地下金庫への現金搬入の工夫

中央銀行の設計にあたり、金庫は辰野金吾が新たに知見を得る必要のある重要な要素であった。欧米視察時に各国の中央銀行では金庫も視察している。その要ともいえる金庫扉は、イングランド銀行でも用いていたホブスハート社の金庫扉を用いることとなった。



正面玄関に對面して地下金庫につながる貨物用エレベーターを設け、その外壁が金庫と正面玄関につながる中庭の防壁となっている。中庭から客溜に向かう動線と、同じ中庭から地下金庫に現金を搬送する動線を巧みに分離している。



日本で2番目のエレベーター

#### 先駆的設備の導入

エレベーター、シャッター、水洗便所、照明など当時としては先駆的な設備を取り入れた。欧米視察を終えた辰野金吾の意向によるものである。



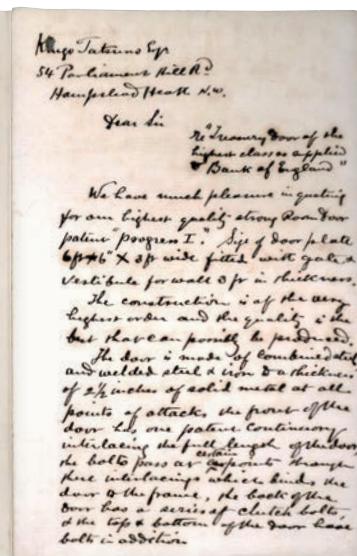
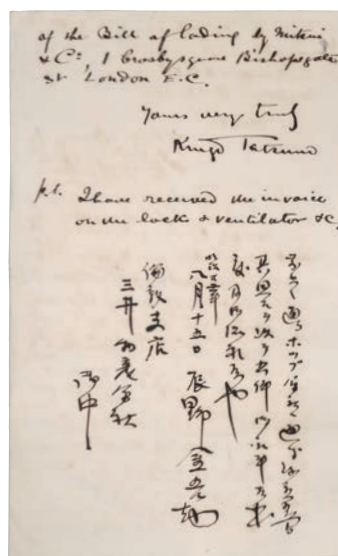
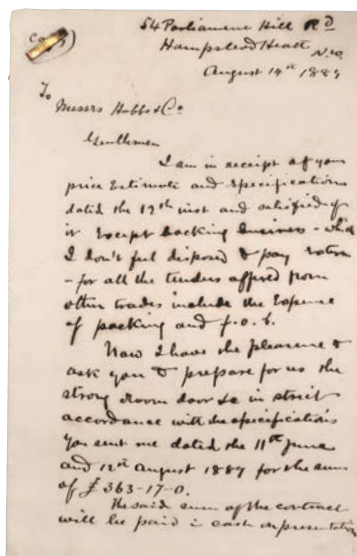
#### ホブスハート社の金庫扉プレート

本店本館の金庫鉄扉に取り付けられていたもの。



#### 本店本館地下旧金庫 ホブスハート社製鉄扉

扉厚さ100mmは当時欧米でも最上級の防盜性能を有していた。輸入した同鉄扉を参考に、国内の山田金庫店に同等の金庫鉄扉を発注し、国産金庫会社の育成を図った。



#### ホブスハート社の金庫扉の発注に関する書簡控

1889年 辰野家蔵

辰野金吾が日本銀行本店金庫扉をイギリスの金庫扉製造会社ホブスハート社 (Hobbs Hart and Company Limited) へ発注するにあたり、その仕様の確認や支払いなどについて、ホブスハート社、三井物産会社ロンドン支店と交わした手紙の控え。金庫扉に363ポンド払うこととする旨、イングランド銀行の金庫扉の仕様の確認などが書かれている。



本店本館地下旧金庫 山田金庫製鉄扉

ホップスハート社製の金庫扉の内側に設置された主金庫中央の山田金庫製の鉄扉。内国勧業博覧会でその技術を認められ、指名で金庫扉製造を請け負った。プレートには「東京山田・明治二十五年・製造」(1892年)とある。



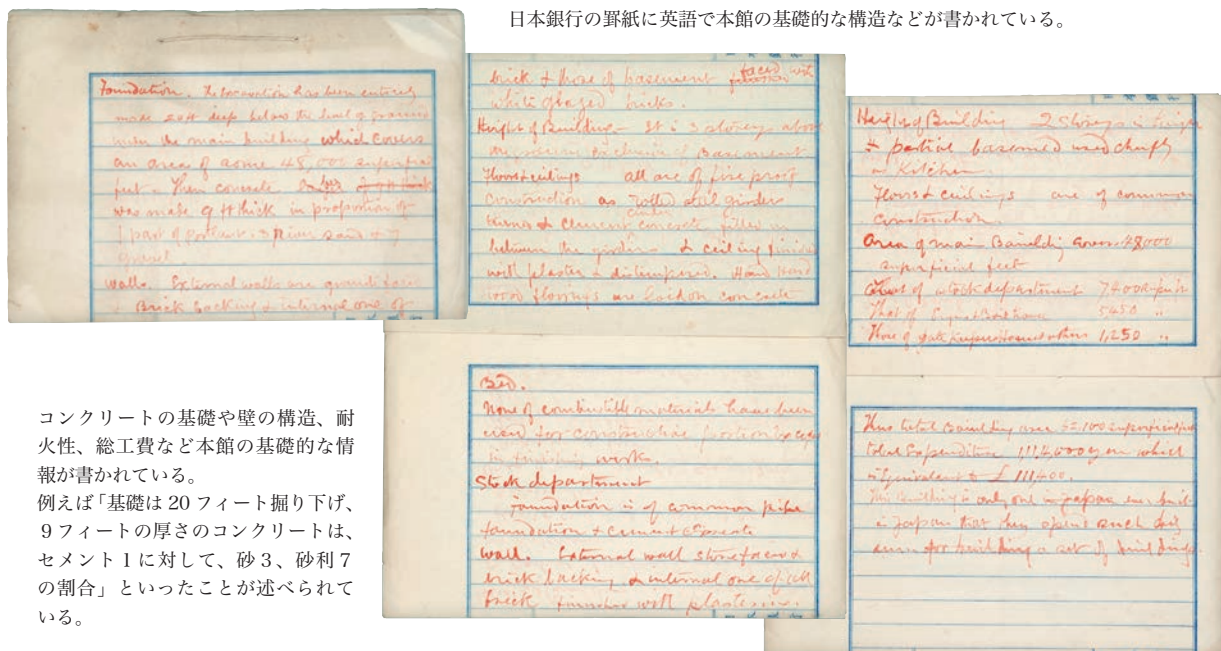
安全庫二就テ

1891年 辰野家蔵

1891年2月の造家学会における辰野金吾の講演(速記録)。金庫室、金庫鉄扉の構造など、欧米金庫の最新情報を紹介している。日本銀行新本店設計のための欧米巡回は欧米の金庫施設を視察することも、その大きな目的であった。

辰野金吾が記した日本銀行の基本情報

日本銀行の罫紙に英語で本館の基礎的な構造などが書かれている。



コンクリートの基礎や壁の構造、耐火性、総工費など本館の基礎的な情報が書かれている。例えば「基礎は20フィート掘り下げ、9フィートの厚さのコンクリートは、セメント1に対して、砂3、砂利7の割合」といったことが述べられている。

辰野家蔵



# 5. 弟子達が語る日本銀行での辰野金吾の姿

## 『工学博士 辰野金吾伝』

白鳥省吾編

辰野葛西事務所 1926年

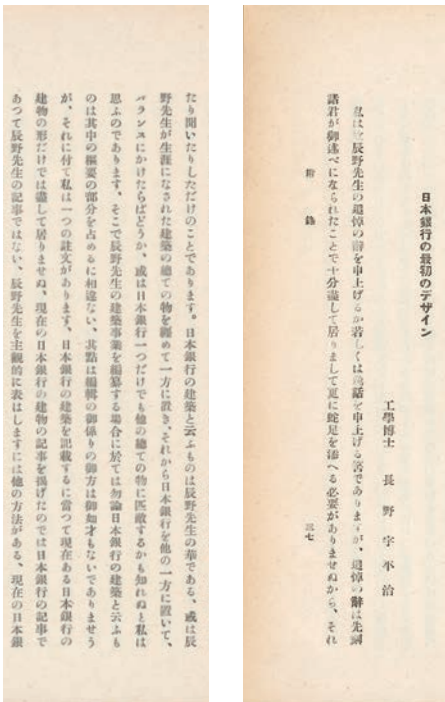
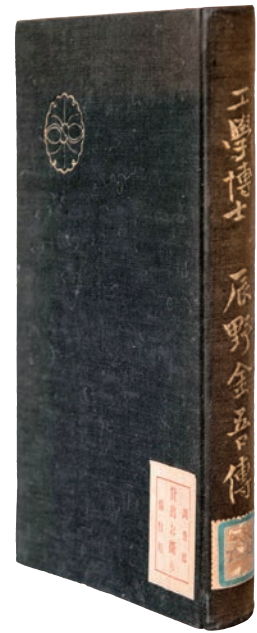
辰野金吾の没後、その功績を後世に伝える記念事業の一つとして、肖像画、『辰野紀念 日本銀行建築譜』と共に伝記の編纂が企画された。

建築教育家、建築学会会長さらに建築実務家として、幅広い建築界における功績のほか、幼少期からの足跡と晩年の回想が綴られている。

辰野の盟友となる石橋絢彦、曾禰達蔵、中村達太郎、葛西萬司の4人を実行委員として発行された。

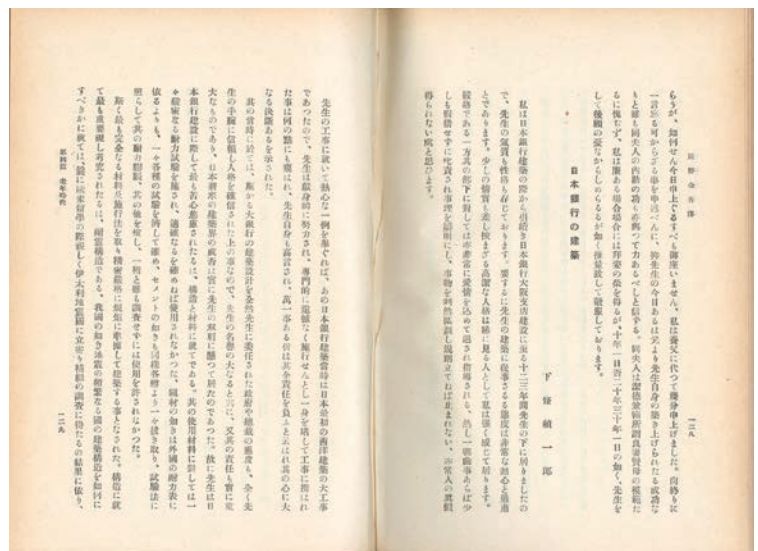
口絵の写真のうち辰野金吾による作品は日本銀行の写真（外観・内観の2点）のみが掲載されている。

また日本銀行のための視察の洋行について岡田時太郎による回想録も掲載されている。



「日本銀行の最初のデザイン」 長野宇平治

日本銀行技師として辰野金吾と共に日本銀行建築を築いた長野宇平治による、辰野没後の一周忌追悼会での談話。日本銀行本店のデザインについて書かれており、設計当初のデザインが建築中に変化していったことと、日本銀行建築譜に当初デザインを記録に残す計画であったことがわかる。当初の設計図はその後の震災で焼失し、叶わなかった。



「日本銀行の建築」 下條禎一郎

日本銀行技師として辰野金吾の下で本店建築に携わった下條禎一郎が、辰野の遺稿の機に建築雑誌に投稿したもの。日本銀行本店の建築について書かれており、辰野が建築現場に投じた愛情と厳格さについて知ることができる。



2・3階を貫く双柱の大オーダーとシンプルなペディメント



ドリス式の列柱が巡る中庭（正面玄関）